編　集　後　記

- 時は流れ、時代は移り、社会環境が変化すると人間の持つ価値観も変わるものだと解ってはいたが、そのことを思い知らされた一年であった。
- いかに時代や人が変わろうと、一つの目的に向かって統一されたチームでは、普遍的に受け継がれてゆく意志や目的、価値観は変わるものではないという信念に近い思いは、脆くも崩れ去り、卒業以来40数年保ちつづけたパワーが急速に萎んで行くのを実感している。
- 私を育て、幸せで充実した学生生活を送らせ、その後の人生の支えとなった航空部。後に続く者達にも、同じ思いをさせてやりたいという一念から、叫び続けた航空部の理想像は、時代の流れについて行けないガチガチに硬い頭の独り善がりな幻想に過ぎなかったのか？（私の中で、嗚呼、我が航空部よ何処へ行く……である。）
- という独善から発想した、特集「原点に戻ろう！」であった。時代を区切って多くの翔友に原稿を依頼した。ご多忙で書いて頂けなかった方々もあるが、多くの先輩が各々の「原点」に寄せる思いを語って下さった。共通するのは、航空部が「強くなって欲しい」という一点に凝縮されるのではなかろうか。
- 今年も翔友会総会が例年通り終了した。毎年変わらぬ顔ぶれで。喧喧諤諤の論議も無く…良いことなのか、進歩が無いのか…。はたまた翔友会の活動に、問題意識を共有し、その解決に向けて努力しょうという力と魅力が欠けるのか…。
- 来年70周年を祝う行事を実行することは、今からではおよそ不可能である。仕方なく75周年に向けて準備に入ろうというのが総会での大方の声であった。そのためには、若手 OB の奮起が必要である。翔友会活動全般について「年寄りは其処をどけ、俺たちがやる」という気概を持った若い OB は居ないのか、情けないぞ！。「OB は、もっと現役の活動や翔友会に関心を持ってくれ」と、声を大にしたい。
- 「翔友」発刊20号の節目に、それに相応しい内容の編集をしたかったが、結果としては、このようなものでお茶を濁してしまった。力量不足を痛感している。前編集長、牧野先輩の鶴の一声で引継いだ10号以来、呻吟しつつも、原稿依頼に応じて下さった多くの翔友に助けられて此処まで来られたことに深謝するのみである。しかし、時代や航空部の潮目が変わってしまった状況について行けない硬い頭ではネタも根気も続かなくなってきた。毎号同じような味付けでは、読む方も面白くも何とも無いことであろう。そろそろ編集長も交代する潮時である。「よし、俺が引き受ける」と名乗り出て下さる方が居ればベスト、無ければ幹事会で人選をして頂きたいと切に希望する次第である。
- 学生への原稿依頼が、3年連続無視された。最早、何をか云わんや…。
- 航空部も翔友会も「原点に戻ろう！」

―― 翔友各位のご活躍を祈りつつ20号をお届けする。 ――

翔友　XX　〈非売品〉
平成17年6月1日

編　集　翔　友　会
発　行　同志社大学体育会航空部
印　刷　河北印刷株式会社
京都市南区唐橋門脇町28番地